

まっていたのでは不十分であり、むしろ、自然を操作し人工的な状況を作り上げる製作活動が不可欠ということになる。ここでは、アリストテレス的な理論知と製作知の区別の解消のみならず、むしろ逆転が生じているということもできる。自然についての真の姿を知るためにこそ、自然に介入して人工的状況を製作する技術が必要になるからである。

新しい自然哲学の成立、つまり、近代科学の成立の特徴をベーコン的観点からとらえることは、すでにさまざまな論者によって強調されてきた。また、近代科学の成立の過程である科学革命を象徴する出来事としてガリレイの落下実験や望遠鏡による天体観察などが取り上げられる場合、そこで見出されるのは、人工的に作られた実験装置や望遠鏡のような観測器具を用いることによって始めて可能になった人工的現象であり、そして、まさに人工的に可能になった現象こそが自然本来のあり方を示しているとみなされるようになった点が注目されてきた。こうした点で、近代科学においては、自然と人工の関係について、アリストテレスの見方の一種の逆転が生じていると考えることもできる。つまり注意深く作られたものが、こそが真の自然の姿、真の自然の事実なのだ、というわけである。

しかしながら、ここには明らかに一種の逆説が生じているようにみえる。というのも、真の自然の事実とは、それが作られていることによって明らかになる、というわけであるから、これはすなわち、作られたものはまさに作られているがゆえに作られていないあり方が示されるということの意味しているはずだからである。

この逆説的にみえる現象を解釈する課題には、多くの哲学者が取り組んできた。

そのひとりとして、たとえばカントをあげることができる。というのも、近代初頭に現れた実験科学の特徴を一般の認識論の原則にまで仕立て上げたのがカントだったと考えることができるからである。認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従う、という「コペルニクス的転回」によって認識論の問題を説明した点にこの特徴が現れている。しかしカントの場合には、認識と対象の関係は主観・客観という二元論的図式のなかでとらえられたため、認識可能な対象は物自体と区別された現象に留まるとみなされ、一種の観念論にとどまっているのではないかという疑念をもたれ続けることになった。

現代では、こうした試みとは違った見方のもとで、この問題をとらえなおそうとする試みがなされている。ここでは、アクターネットワーク理論の提唱者のひとりとして知られるブルーノ・ラトゥール¹の見方を参照しておくことにしたい。

ラトゥールの見方では、人間は最初から世界のなかに位置づけられており、自然と社会が重なった場所で多様な要素と相互作用しているとみなされる。そしてその相互作用のあり方を形成する要因がすべて一種のアクターとみなされる（人間以外のアクターは非・人間 [nonhuman] と呼ばれる）。したがって、科学の活動も、こうした相互作用の積み重ねのなかから、特有な仕方²で成立してくるとみなされる。たとえばラトゥールは、バストゥールによる乳酸発酵をめぐる実験を題材にして実験をめぐる逆説的な構造をエガ³いている。

バストゥールは、一八五七年に、発酵をたんなる化学的過程とみる当時支配的であった見方に対して、乳酸発酵が乳酸に固有の酵母という生命体によるものであることを示す論文を発表した。ラトゥールによると、バストゥールがいくつもの実験で試みたのは、新たな人工的な舞台装置を構築することによって、乳酸発酵の酵母という新たなアクターをこの舞台上で登場させることだった。このときにバストゥールが克服しなければならぬ困難は「状況設定がどれほど人工的なものであろうとも、新しい何ものかは、状況設定から独立して出現しなければならぬ」という点にあった。ラトゥールによれば、この逆説的に見える事態の解明に多くの哲学者たちが取り組んできたが、困難を避けられずにきた理由のひとつは、実験をゼロサムゲームとみなし、科学が実験を通して新しいアクターを獲得することによって成長することに注意を払わなかったからだということになる。ただしこのとき、実験によるアクターの製作活動を通⁴常の人工物の製作と同じように考えたのでは理解できない。というのも、実験では、まさに人工的に作り上げられてきたという理由で、あらゆる生産、構築、製作からの完全な自立性を獲得するということが起きているからである。

【文章Ⅱ】

ベーコンの提唱した実験科学は、人工的に作り上げられれば上げられるほど、自立した事実が作られる、という逆説的な性格を示すものだった。そしてこの逆説的性格のために、一方では自立した科学の発展が可能になると同時に、他方では、その科学の発展がそのまま技術の発展に結びつき、さらに技術の発展による社会の進歩が実現しうるようになる。しかしながら、この魔法のような論理が成り立つように思えるのは、大きな前提が支えとなっているからである。実験において自然の真の姿が現れるためには、その舞台を注意深く製作しなければならぬ、というのが出発点であった。しかしこれが意味しているのは、注意深く製作された人工的な状況のなかでのみ自然はその真の姿を現すのであり、それ以外の場面では、かならずしもそうはならないということのはずである。換言すると、原因と結果の関係を表す自然法則は、もし注意深く製作された舞台が用意されたなら、自立したものとして姿を現すが、人工的に設定された実験状況の外では成立するかどうかは必ずしも保証されていないということである。つまり、自然についての知識は限定的、制限付きの知識であるはずである。にもかかわらず、この点に関してベーコンはまったく注意を向けてはいないように思われる。

さらに、自然法則に対応するとみなされる作業の規則に関しても同じようなことがいえるだろう。というのも、自然法則が成り立つ実験状況を作り上げる作業は、再現可能であり、いかなる場所でも成り立つことが前提とされているはずである。実験の成果が科学的事実として認められる最も重要な条件は、再現可能性にあるはずだからである。しかしながら、一般に行われる製作活動、あるいは実践的行為は、類型的な特徴をもつものではあっても、つねに個別的であり、繰り返し不可能であり、テックイ⁵不可能な性格をもっている。だからこそ、人間の行

為には責任が問われることにもなる。この点からみると、実験科学を可能にしている行為は、状況から独立した一種の抽象化され、図式化された行為であり、科学者の活動の自立性といわれる特徴はこのような点を反映しているのである。このような意味で、実験を可能にしている行為のほうも、いわば制限つき、条件付きの行為ということになる。

さてそれでは、なぜペーコンはこのような実験にまつわる条件に関して何も触れていないのだろうか。それは、すでにこれまでの引用からも垣間みられるように、人間が相手にしている自然は神が作ったものであり神の作った自然の斉一性が前提とされているからと考えられるだろう。行為の状況に関しても同様であり、実験室の内と外で、根本的に状況の性格が変わるということは想定されてはいないと考えられる。したがって、科学の見出した知識に限界があると考えたり、その知識によって可能になる技術の働きによって、地球の生態系のバランスが崩れ、人間や生物の生存を脅かすまでになるような限界があらわになったりする、といったことは、ペーコンには思いもよらぬことだったのかもしれない。人間が人間自身を作ったり、作り変えたりするといったことになるとは思いもよらぬことだったのかもしれない。実際、ペーコンは『知識の養美』では次のように述べている。「人間の尊厳は疑いもなく知識のうちに隠れている。……今、われわれは意見において自然を支配しているが、必然においては自然の奴隷である。しかし、発見において自然のなかに導かれるならば、行動においては自然に命令することができるようである。」ここでは「自然の奴隷」であるという言い方さえしているが、これはまさに神の奴隷である、ということの言い換えにはかならないのであり、このことがペーコンに科学技術にもとづく進歩という楽観的な見方を可能にしたのである。

(本文中に一部省略・改変したところがある)

問1 二重傍線部A～Eに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は①②③④⑤。

A メイシン

①

① メイドの土産とする。

② 近隣の国とメイヤクを結ぶ。

③ 米のメイガラにはこだわらない。

④ 景気のテイメイの責任をとる。

⑤ 大地のメイドウを聞く。

B シンサ

②

① 不安が部員同士でレンサする。

② ササツを受け入れることにする。

③ 兄弟げんかはニチジョウサハンジだ。

④ 民衆をキョウサ扇動する。

⑤ 経歴サショウが発覚する。

C ギョウセキ

③

① 昨年の秋に伯母がキセキに入った。

② 明治時代のボウセキ業について調べる。

③ セキツイの痛みが治まる。

④ 荷物のシュウセキ地として栄える。

⑤ 過失は不問となりメンセキされた。

D エガいている

④

① シュビョウ法を改正する。

② 彼はアイビョウ家として知られる。

③ 庶民の日常生活をソビョウした作品。

④ ビョウシンをおして上京する。

⑤ スンビョウを争う事態となる。

E テツカイ

⑤

① 海外事業からテツタイする。

② テツコウセキの採掘に乗り出す。

③ 外務大臣がコウテツされる。

④ テツタイ抗戦を奮う。

⑤ センテツの教えに学ぶ。

問2 傍線部A「技術の歴史を自然哲学(いま風にいえば自然科学)のためにもっとも重要なものとみなし」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は①②③④⑤。

① ペーコンは、技術は個々の経験だけでは大きな意味をもたないが、誰かが考察するならば互いに連結されると考えたから。

② ペーコンは、自然の真の姿を明らかにしようとするならば、人間が自然に介入して人工的な状況を作る必要があると考えたから。

③ ペーコンは、被造物たる自然の過程や変化をただ観想するだけでは、神の作った自然の姿を知るには不十分だと考えたから。

④ ペーコンは、自然は普段その姿を変えないが、技術によって苦しめ悩ますとき、本来の荒々しい姿を現すものだと考えたから。

⑤ ペーコンは、人間こそが万物の支配者であり、自然は技術によって改変されてこそ、価値を生み出すものであると考えたから。

問3 傍線部イ「理論知と製作知の区別の解消のみならず、むしろ逆転が生じている」とあるが、これについて説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

びなさい。解答番号は⑦。

- ① 被造物を観察するという自然の歴史に基づく学問よりも、人工によって変えられた自然の歴史を考慮する学問が優位になったということ。
- ② 自然哲学において、実験の積み重ねによって実証的に知識を得る方法論よりも、理論を中心とする方法論が重視されていたということ。
- ③ 一人の天才的哲学者が「観想」によって得た真理よりも、個々の経験を互いに利用し合ってきた技術の歴史の方が意義深いということ。
- ④ 真理を純粹に理論的に考察する知を、何かの目的のための手段である技術を通して得る知よりも上位におく見方が転換されたということ。
- ⑤ 技術の進展に伴い、理論のみで結論に到達する知恵に加えて、製作活動に伴う知識・能力も必要とされるようになったということ。

問4 【文章Ⅰ】の波線部「一種の逆説」、【文章Ⅱ】の波線部「逆説的な性格」について、こゝでの「逆説」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は⑧。

- ① ある出来事が生じた原因を特定するためには、多様な要因のなかから本質的な原因ではないものや単に付随して起きている現象などを排除して、実際に働いている要因のみを取り出す必要があるということ。
- ② アリストテレスは、自然はそれ自身で明確な法則や意志をもたずただあるがままに存在すると考えていたため、近代科学においては、自然と人工の関係についてアリストテレスの見方が逆転しているということ。
- ③ 実験の結果が科学的事実として認められるためには再現可能であることが重要だが、そのためには注意深く製作された人工的な舞台において、自然法則が自立したものとして姿を現すことが必要だということ。
- ④ 「真の自然的な事実」と称されているものは恣意的な「観想」により作られたものであり、作られていないあり方を明らかにするためには、自然による影響を極力排除しなければならぬということ。
- ⑤ 自然哲学は自然を操作することをよしとしないが、自然の真の姿を理解するために、アリストテレス的な理論知と製作知が区別されたうえで、人工によって変えられた自然の歴史があるということ。

問5 傍線部ウ「コペルニクス的転回」とあるが、この語のもつ意味とはほぼ同意の語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は⑨。

- ① ノーマライゼーション
- ② ソフトランディング
- ③ パラダイムシフト

④ ポストモダン

⑤ ア・プリオリ

問6 傍線部エ「現代では、こうした試みとは違った見方のもとで、この問題をとらえなおそうとする試みがなされている」とあるが、この試みの一つである「アクターネットワーク理論」とは、どのようなものだと考えられるか。適当なものを、次の①～⑤のうちから二つ選びなさい。解答番号は⑩・⑪。

- ① 世の中のもの、主観・客観という単純な関係でとらえられるのではなく、複雑なネットワーク上で様々な要素と相互作用しているとみなすというもの。
- ② ネットワーク上の相互作用のあり方を形成する要因を一種のアクターとみなすが、そのアクターを人間に限定して考えるというもの。
- ③ 世界は「人間」と「人間主体から見た外部」という二元論的な関係で構成されているのではなく、自然と社会が重なった場所に人間が位置づけられているというもの。
- ④ 科学においては、実験を通して新しいアクターが生み出されることの積み重ねのなかで、新しい理論が次々と生み出されていくというもの。
- ⑤ 社会的・自然的世界のあらゆる場所に、相互作用の主体である人間と、その対象である非・人間とが、絶えず関係性を更新しながら存在しているというもの。

問7 傍線部オ「ゼロサムゲーム」とあるが、この語の説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は⑫。

- ① ゼロサムゲームは、参加者の誰かが勝利を得た場合に、他の誰かが敗北するというゲーム理論のことであり、代表的な例としては将棋が挙げられる。
- ② ゼロサムゲームは、一方が得点した場合に、他方が失点し、全体の総和がゼロになるというゲーム理論のことであり、その代表的な例としてリバーシがある。
- ③ ゼロサムゲームは、誰かが利益を得た場合に、他の誰かに不利益が生じるという理論であり、日々価格が上下する株式市場がその代表的な例である。
- ④ ゼロサムゲームは、複数の参加者の利益と損失の総和がゼロになるゲームのことで、敗者が出した資金を、勝利した者で分け合う競馬は、このゲームに含まれる。
- ⑤ ゼロサムゲームは、つねに参加者全員の合計得点がゼロになるという理論のことで、一方のレートが上がると、他方のレートが下がる為替取引は代表例と言える。

問8 Tさんは、【文章Ⅰ】のガリレイやバストゥールの具体例が何を伝えるためのものかを理解するために、「落下実験」・「乳酸発酵をめぐる実験」について調べているうちに、さらに共通性をもつ実験があることに気づき、【ノート】にまとめた。【ノート】と【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】の内容を踏まえて、後の(1)・(2)に答えなさい。

【フリート】

●ガリレイの落下実験

従来の説

物体が落ちるのは重さがあるから
重い物体の方が軽い物体よりも早く落ちる

⇒

ガリレイの仮説

重さが異なる物体も同じ速度で落ちる

実験の工夫

ななめに物を転がす器具と精密に時間を計る時計を製作

実験結果

落下の速度は重さとは無関係であることを証明

●バストゥールのスプーンの腐敗実験

従来の説

微生物は空気のない環境でも自然に発生する

⇔

バストゥールの仮説

微生物は自然に生まれず、外からやってくる

実験の工夫

白鳥の首フラスコ（首の部分細長くS字型に湾曲していて、

空気の出入りはあるが雑菌は侵入しにくい）を製作

実験結果

外気を遮断したフラスコのスープには微生物が発生せず、スープは腐敗しなかった

発酵や腐敗が微生物によってなされることを証明

●共通点

① 従来の説を疑い、自らが立てた仮説を検証した

② 実験における工夫

「工夫」はなぜ必要だったのか⇒ X から。（【文章Ⅱ】より）

これが何を指しているか？⇒ 実験とは「 Y」ということ。

（【文章Ⅰ】より）

(1) X に当てはまる内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

びなさい。解答番号は ⑬。

① 科学の発展がそのまま技術の発展に結びつき、さらに技術の発展による社会の進歩が実現しうる

② 実験において自然の真の姿が現れるためには、その舞台を注意深く製作しなければならぬ

③ 自然についての知識は限定的、制限付きの知識である

④ 一般に行われる製作活動、あるいは実践的行為は、類型的な特徴をもつ

⑤ 実験室の内と外で、根本的に状況の性格が変わるということは想定されてはいない

(2) Y に当てはまる内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

びなさい。解答番号は ⑭。

① 個々別々の技術の経験がただひとりの頭脳によってまとめて考察されるとき、これ

までに得られたのよりも真実はほんものの知識を与える

② 人工的に作られた実験装置や望遠鏡のような観測器具を用いることによってはじめ

て可能になった人工的現象である

③ 認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従う、という「コペルニクス的転回」に

よって認識論の問題を解明した

④ 人間は最初から世界のなかに位置づけられており、自然と社会が重なった場所で多

様な要素と相互作用している

⑤ 科学が実験を通して新しいアクターを獲得することによって成長することに注意を

払わなかった

問9

傍線部カ「だからこそ、人間の行為には責任が問われることになる」について五人の

生徒が話し合った。本文の趣旨を踏まえた発言の内容として適当でないものを、次の①

～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑮。

① Aさん：「ペーコンは自然に介入することを当然と考え、人間の行為に歯止めが必要

という点には思いが至らなかったようだね。【文章Ⅱ】では、「まったく注意

を向けてはいない」「思いもよらぬことだった」などと、ペーコンがこの点を

意識していなかったことが繰り返し述べられているよ。

② Bさん：「ペーコンの想像外のことのひとつが、「地球の生態系のバランスが崩れ、人間

や生物の生存を脅かすまでになる」ということだね。科学技術のもたらす成

果が地球環境の変化をもたらし、気づいたら取り返しつかないところまで

来ている。科学技術の功罪を長期的に見ていくべきだったんだ。

③ Cさん：「人間が人間自身を作ったり、作り変えたりする」というのもそうだね。遺

伝子工学が発展して人間のクローンを作成し、ゲノム編集を行うことも可能

になった。こんなふうには人間の尊厳を脅かすような事態になってしまうん

で、ペーコンの時代には想像もつかなかったと思うよ。

④ Dさん：「科学の発展のスピードに「倫理」がついていないんだ。科学のおかげ

で人間が文明の恩恵を受けられたのだから、科学者よりも恩恵を享受する側

の責任だね。筆者もそう考えていることが、「自然についての知識は限定的、

制限付きの知識であるはずである」からわかるよ。

⑤ Eさん：「ペーコンは「自然は神が作ったもの」と考えていたようだから、神の創造の

範疇^{はんちゆう}を人間が超えるとは思わなかったんだろう。」「科学技術にもとづく進歩

という楽観的な見方を可能にした」とあるように、人間が改変できる範囲に

対して高をくくっていたんじゃないかな。

二 次の文章は、小池昌代「風のリボン」「感光生活」の全文である。これを読んで、後の問(問1～9)に答えなさい。解答番号は⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

七夕家さんから、

「会いませんか」

と電話がかかってきた。

「二人の娘もいっしょなんだけど、いいですか。神保町の東京堂あたりで。次の土曜日、どうでしょう」

静かな口調ながら、次々とたみこむ、七夕家さんの言い方には、独特の押しがある。断るとあとで、なにか変なものに取りつかれそうである。しかし「二人の娘」とは、なんだか雨上がりの光る露のような言葉だ。わたしはすぐに、

「うん、いいよ」

と、返事をした。

わたしには子供がいなくて子供には目がない。子供といっても、ある幅のなかにある子供が特別におもしろい。下は五歳、六歳から、上は、せいぜい、九歳くらいまで。このあいだにある子供たちには、外側から容易になかへ入り込めない、分厚い熱を帯びた皮膜がはられていて、独特の空気が漂っている。貴族的とでもいえる感じが、わたしにはたまらなく魅力である。それはまるで失ってしまうことがあらかじめわかつている、宝物のような、子供たちの秘密だった。

どんなに大勢の大人たちに囲まれていたところで、そうした子供は、彼ら大人たちの日常世界から、はつきりと断絶し、孤独な球体を形作っている。例えばある日のある子供は、ほんやりとした目で、流れる水を見ていた。また、雲を見つめてあきない子供もいたし、ひとつの石をけりながら、いっしんに帰り道を歩く子供もいた。また、そうかと思えば、長いあいだ、土のうえを見つめてしゃがみこんでいる子供もいた。

どの子供たちも、この世では、無意味と名づけられている聖なる空間に、魂を投げ出すようにして生きていた。わたしは大人が、常に、ある時点からある時点の、区切られた時間のなかでしか生きられないときも、彼らは底のぬけた、両端のない、途方もない黄金の時間を生きている。そのとき彼らのなかにある生命は、まるで熱帯の植物たちのように、みつしりと濃く充溢しながら、それぞれが唯一のものとしてそこにあった。そうした命のありさまを見ると、わたしはいつも、静かなよるこびで満たされたものだ。

見ているだけでも十分だったが、ときおり、彼らの身近に寄って、その身体に触れたりすると、手や足の思いがけない小ささに胸をつかれ、すべすべした肌の陶然とするようななめらかさに驚く。

そういえばこのあいだ、スコーンという焼き菓子を作ったおり、小麦粉とバターを手で捏ねながら、これは昔、ひとの子を抱いたときの、肌の感触にそっくりだと思った。粉の手触りというのは、これはほとんど陶然とするくらい、官能的なものだ。さらさらとしたなかに、きしきしとまとわりつく、絹の布のような、幽かな粘性がある。粉を扱うひとは、こうしたことを十分に知り、それを楽しみながら、あまり表現しないように思う。いつもただ、モクモクと粉をこねるだけだ。こくちいさな子供と、小麦粉の感触には、意外にも同質の官能性がある。それは、触れるものをおののかせるほどの、意外で危険な魅力である。

七夕家さんは、今年四十一歳。そんな、宝のような娘たちをもっていることに、まるで気がついていないというような、いつも薄らばんやりしているひとである。でも案外こんなひとが、じっくりものごとを考えていたりするのだ。

じつくりと言えば、確かに粘りは強い。なにしろ、いまだに、司法関係の資格試験を受け続けているというひとだから。七夕家さんは大学で法律を学び、卒業してからは十年以上、司法試験にチャレンジしていたというが、ずいぶん前から試験制度が変わって、受験回数に制限がかかるようになったという。それでやむなくあきらめて——もし、何回でも受けられるのなら、いまだってあきらめてはいませんよ、と彼は言うのだが——、いまは司法書士など、ほかの資格試験に挑戦しているというのだ。学生時代からおよそ、三十年。その間、仕事らしい仕事にはついていない。三十年という、ひるむような年月だが、いつ会っても七夕家さんは、けろつとしている。今の顔のすぐ横に、学生時代の顔を並べても、案外変わっていないのではないか。とにかく、いつまでたっても、青年と中年の、その途中を懸命に生きているようなひとなのだ。

目の下に万年、隈を作っているが、子供の世話で疲れているのかもしれない。奥さんは大企業に勤める会社員なので、一家の収入は、彼女がすべて稼ぎ出す。そのかわり、七夕家さんが、家事・育児の大方をこなしているのだという。でも、七夕家さん、ほんとに勉強なんかしてるのだろうか。なにしろ、このひとには、詩を書くという悪癖があつて、それで、わたしとも、知り合ったわけなのだが、最近勉強より、ますます詩のほうに熱が入り出しているようなのだ。

約束の十日がきた。午後六時までは、まだ少し間がある。東京堂は、見やすくてさっぱりした本屋なので、わたしは好きだ。神保町に來ると、必ず立ち寄るが、きょうは、こころなしか、閑散としている。雨降りの平日は、こんなものなのか。うろうろしていると、後ろから、

「こいけさん」

と、すり出したような、くらしい声があった。

振り向くと、そこには、相変わらず目の下に隈のある、七夕家さんの四角い顔がある。七夕家さん、こんなに、四角い顔だったかな、そう思いながら、確認するように、じろじろ見ると、

「なんですか、人の顔をじろじろと、失礼な」と言うのだ。わたしは顔のことは振り払い、

「久しぶりだね」と笑って言った。

二人の娘たちもいっしょである。

「初めまして、こいけといいます。よろしくね」娘たちに向かって挨拶した。

「名前」と聞くと、

「響子」

「梨影」

と、油断をとかない、小動物のような、小さな声があがった。

「きれいな名前だね」

すると、返事のかわりに、涼しい視線だけが、私に向けられる。

二人とも、蒙古のひとのような、細い、美しい目をしている。草のなかをずっと歩いてきたような匂いを発していて、目をきよきよと動かしながら、好奇心を四方に散らかしていた。近頃珍しい自然児たちのようだ。わたしはまるで人買いの女のように、この子供たちをゆつくり眺めやうとした。

「ここで待ち合わせをしたの？」

と響子ちゃんがわたしに聞く。「待ち合わせ」という言葉をはじめて使ってみた、という感じの言い方だった。

「そうよ。ここも本屋さんだけど、ここは町全体が本の町なんだよ。本さんがたくさんあるんだから」

そう言うと、響子も梨影も、

「じんはうちようは、ほんのまちい」

と歌を歌うようにさえずり始めた。二人が生きたところ、小さな渦巻きが、次々と生れていくような感じだ。歌か、しばらく歌を歌っていないなあ、とわたしは思った。歌というのは、確かに、この世の渦巻きみたいなものだ。そのなかでは敵も味方も、おかしさも悲しみも、なにもかもがごちゃごちゃにカキマゼラレル。

子供のころ、わたしは本当に歌が好きだった。いつも歌ばかり歌っていた。歌を歌いながら道を歩いた。あるときはともだちと。あるときは妹と。歌詞を間違えたり、音程をはずしたり、そのたびに止まっては、最初からやり直す。ひとつの歌を、誰かと歌うことの楽しさやなまめかしさが、不意にわたしに思いだされた。ああ、大人になるってなんてあじけないことだろう。わたしは突然、歌いたくなって、そして、歩きながら、こんな歌を歌ったのだ。

「七色の谷を超えて

流れて行く

風のリボン……

輪になって

輪になって

かけて行つたよ……

春よ春よと

かけて行つたよ……」

二人はこの曲を知らないようだった。変なひとが突然歌いはじめたよ、という不安な顔をしていたが、やがて、表情が和らいできて、

「それなんていう歌」

と響子ちゃんが聞いた。

「知らない」

といった。

曲のタイトルは、本当に知らなかった。團伊玖磨というひとが作曲をして、江間章子というひとが作詞をした名曲なのだ。

二人を見れば、フリースと呼ばれる、新素材のあたたかなかぶりものを着ている。足元を見れば、歩きやすそうな運動靴をはいていて、その足の小ささに胸をつかれた。

小さな靴というものは、どんな極悪人の心をも緩めるのではないか。わたしもまた、あの小ささから、歩いてきたのである。そんなことを思いながら、七夕家さんを見ると、

「こいけさん、相変わらずだね」と苦笑している。わたしが突然歌ったしたので、すっかりあきれているのだった。

「久しぶりに来たので、本をたくさん買ったわよ」

七夕家さんに言うと、彼の顔もほころんだ。

「読みたい本があるというのは、幸せなことだね。会う約束をしたばかりの友達がいるみたいな感じかな。ほくも、四時くらいに来て、あちこち、うろろしておつたんです。それじゃあ、そろそろ、ろしあ亭に、行きましょうか」

七夕家さんは、そう言つて、わたしたちを店の外へとつながした。ろしあ亭というのは、わたしもよく知る、ここから歩いてすぐの、ロシア料理のご飯屋さんだ。

店に到着し、ドアを開けてなかへ入ると、夕食どきだというのに、がらんとしていて、奥から、どこか昆虫を思わせる奥さんが出てきた。

「こんにちは。今日も子供づれなんですが、毎回どうも、お騒がせします」

七夕家さんは、その書く詩とはうらはらの、常識的で慎ましい態度で、昆虫顔の奥さんに頭を下げた。

「あら、いいわよ、ようこそ、毎度、ありがとう。さあ、おじょうちゃんたち、こつちへどうぞ」

奥さんはさっぱりとした笑顔になって、子供たちを促す。さえない七夕家さんが、ろしあ亭の常連とは、意外だった。しかし今日も、子供を連れていくということに、非常な忍縮を感じているようである。たしかに、子供は騒ぐしうるさいじつとしていないし。

「あーおながすいたよ！」

テーブルにつくなり、梨影の、黄色い第一声があがった。

今朝、七夕家さんから電話があつたとき、彼の声は妙に重く沈んでいた。

「こいけさん、きょう、東京堂で待ち合わせのこと、大丈夫ですよ。よろしく願ひします。きつと、きつと、ですよ。それで……ただ会うつていうのもなんだから、最近お互いが書いた詩を持ってくるつてのはどうですか。合評会をしましょうよ」

どこまでも真面目な、七夕家さんなのである。わたしはぎょっとした。それから、ふふふとおかしくなった。詩を十年くらい書いてるが、わたしは合評会というものを経験したことがない。合評会というのは、その場に作品を持ち合い、互いに批評し合う会のことだ。

しかし、わたしは、そもそも七夕家さんよりも、子供たちに会いたかつたのだ。彼女らを眺めたり、彼女らと話をしたりするほうがずっと楽しいことのような気がした。それでも熱心な七夕家さんを、傷つけるような返答はできるわけもなかつた。うん、うん、わかつたよといいかげんな返事をして、なんとなく、ごまかしてしまったのだった。

気がつけば、テーブルには、料理が次々と運ばれている。ピロシキ、きのこの竜焼^{りゅうやき}シチュウ^{しちゅう}。ピーフストログノフ……。ちよっと、いつのまに、七夕家さん、こんなに頼んだのだったかしら、と少しいぶかしく思いながら、それでもわたしは、気をつけて、気をつけて、熱いわようと、すっかり、幼稚園の園長さんのように、その場をとりしきり、料理を、もりもりと切り分けてやった。

もちろん、合評会など、成立するはずもなかつたが、そのあわたしさのなかで、七夕家さんとわたしは、昆虫が触角を触れ合^ふすように、互いが書いた詩を交換しあい、それぞれ相手の詩を眺めたのであつたが、わたしについていえば、七夕家さんの詩は、全体の感じが小難^{こがた}し^しそう^{そう}で、そもそも第一行目から、よくわからなかつた。見たこともないような漢字が使われていた。わたしは読むのを、すぐに放棄してしまつた。そして七夕家さんはどうかといえ、わたしの作品を、ふんふんとうなずきながら読んでいたが、それきり何の感想ももらさなかつた。

テーブルのうえの様々な料理は、みごとなくらいに、次々とたいらげられていった。食べるのは、ほとんどが二人の娘たちだ。ちよっと待つて。それ、わたしまだ食べてないのよ、わたしにもひとくち、残しておいてよ。そう言いたいのをこらえながら、彼女らに食べさせているわたしがいた。死への距離を測る透明なもののさが、するすると目の前に伸びてきたようだった。わたしに比べれば、未来の時間がずっと長いこの子らに、まずは食べさせてやらねばならない。しかしこれでは食費もたいへんだらう。まったく食欲の旺盛なやつらである。

七夕家さんは、詩の話をもつともつとしたい感じだったが、そのたびに二人の娘のどちらかが、皿にフォークをがちゃがちゃと当てて音をだしたり、椅子から滑り落ちたり、床に食べ物^{もの}を落^おしたりした。七夕家さんは、始終、あーあ、とため息をつきながら、女親のように、制したり、叱^{のの}つたり、テーブルをさつと拭^{ぬぐ}いたり、こぼれたものを拾^{ひろ}い、まめまめしく彼女らの周辺を動いた。

「こちそうさまでした」

ようやく食事が終わつたとき、わたしは子供のいる食卓の現実^{げんじつ}に、ほとんど圧倒され、言葉もなかつた。

店を出ると、太陽が西空に沈みかけている。

「おいしかったか」と七夕家さんが聞いた。

「おいしかった、おいしかった」と二人が答えた。

それから地下鉄の駅まで歩き、

「さよなら」とわたし。

「さよなら」と三人。

まさに詩の話など、している場合ではなかつた。

後日、上の子供、響子ちゃんからはがきが届いた。

「とても楽しかつたです。こいけさんとおとうさんの会話を少し聞いて、わたしは同じことが好きなものどおしいなあと思いました。うらやましいような感じがしました。さようなら」

うらやましい、という、思いがけないその言葉に、透明な、柔らかな、不思議な三角形が初めて意識された。響子ちゃんは、おとうさんの女のともだちを、いったいどのように認識したのだろう。

地下鉄で別れた後、姿が、そのとき、わたしの胸に浮かびあがつた。七夕家さんを真ん中にして、その右手と左手にそれぞれの娘たち。響子ちゃんが見上げて、七夕家さんに何かを言っている。七夕家さんも、笑いながら何ごとかを響子ちゃんに返している。三人は透明な膜で包まれ、この世に浮^うんでいるしやぼんだまのようだった。

あの日、わたしは何をしたのだろう。わたしは実に何もしなかつた。わたしはただ、七夕家さんと二人の娘に会つた。そして、三人が、夕暮れの町に消えていくまでをただ、静かにひとりで見送つたのだった。

問1 二重傍線部A～Eの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 16 ～ 20。

A 押し

16

16

20

① 心ひかれる魅力を持つこと

② □をはさむ隙を与えないこと

③ 断りにくい雰囲気を持つこと

④ 静かな熱気が漂っていること

⑤ 他人を従わせる迫力があること

B おののかせる 17

① 恐怖で体をこわばらせる

② 心を弾ませわくわくさせる

③ そつと後ずさりさせる

④ 高揚感で身震いさせる

⑤ 悪い予感で打ちのめす

C ひるむ 18

① しりこみする

② 気が重くなる

③ あきれる

④ 力が抜ける

⑤ おじけづく

D 胸をつかれた 19

① ショックを受けさせられた

② はつとさせられた

③ 感動させられた

④ 感傷的にさせられた

⑤ ぞつとさせられた

E 慎ましい 20

① 真心がこもった

② 恥ずかしそうな

③ 思慮深そうな

④ 地味で質素な

⑤ 気がひけた

問2

傍線部ア「彼らは底のぬけた、両端のない、途方もない黄金の時間を生きている」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

21。

① 五歳、六歳から、九歳くらいまでの子供たちは、大人にはない独特の空気を漂わせているということ。

② 子供たちは、大人たちが過ごす日常の世界とは全く異なる充実した時間を過ごしているということ。

③ 子供たちは何かに夢中になると、時間が経つのも忘れていつしんに心を傾けているということ。

④ 子供というのは、何か一つのことを心を奪われると、周りのことが見えなくなるということ。

⑤ 大人にとっては無意味なことでも、子供たちにとっては心を育ててくれる大切なものだということ。

問3

傍線部イ「そっくりだ」とあるが、ここでのそっくりなものの組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

① スコーン ———— ちいさな子供の肌

② 小麦粉 ———— バター

③ 絹の布 ———— 小麦粉

④ 小麦粉 ———— ちいさな子供の肌

⑤ 絹の布 ———— スコーン

問4

傍線部ウ「いつまでたっても、青年と中年の、その途中を懸命に生きているようなひと」とは、七夕家さんのどのようなところについて述べたものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 23。

① いい年をして三十年も仕事らしい仕事につかずに資格試験に挑戦し続けて、いいかげんあきらめようとしないうという、子供じみて未練がましいところ。

② いつまでも夢を追ひ、妻子がいながら一家の大黒柱として収入を得ようとはしておらず、浮世離れしているが、平然と、しかも真剣に、その生き方を続けているところ。

③ 法律を学んでいた大学時代からの目標である司法試験に挑戦すらできなくなっても、地に足をつけた生活を選ぶこともない、自己中心的で、自由奔放なところ。

④ 一家の収入を稼ぎ出す役目を妻に委ねて悪びれることもなく勉強や詩作にふけっているが、物事をじっくり考えていたり、家事をこなしたり真面目に生きているところ。

⑤ 青年のように自分の可能性を信じて法律家の道に進んでいるが、生活に疲れて目の下に隈を作っている、大人と子供の中間のような、中途半端なところ。

問5

傍線部エ「二人の娘たち」とあるが、「わたし」が感じた「娘たち」の印象の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 24。

① はじめは小動物のように警戒心が強そうに見えたが、すぐに打ち解けてまともわつてきた人なつこい子供たち。

② はじめは声も小さくびくびくしていたが、次第に自分から話しかけたり歌を歌ったりするようになった朗らかな子供たち。

③ はじめは緊張していたものの、名前を褒めると嬉しそうな視線を「わたし」に向けた、美しい目が印象的な子供たち。

④ はじめは名前を褒められても返事もできなかったが、やがて「わたし」を質問攻めにした好奇心旺盛な子供たち。

⑤ はじめは初対面の女の人に警戒を示しつつも、好奇心でいっぱい、草いきれのような匂いのする子供らしい子供たち。

問6 次は、「わたし」が歌った歌に関する発表を聞いて、生徒同士で話し合った会話である。空欄(a)・(b)に当てはまる内容として最も適当なものを、後の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、(a) ㉔ (b) ㉕。

七色の谷を越えて	美しい海を見たよ	すみれ色してた窓で
流れていく 風のリボン	あふれていた 花の街よ	泣いていたよ 街の角で
輪になって 輪になって	輪になって 輪になって	輪になって 輪になって
駆けていったよ	踊っていたよ	春の夕暮れ
歌いながら 駆けていったよ	春よ春よと 踊っていたよ	ひとり寂しく 泣いていたよ

(「花の街」作詞…江間章子、作曲…團伊玖磨)

発表者… この歌について調べてみました。「花の街」とありますが、美しい街並みを見て作られた歌ではなく、実は戦争によって一面の焦土になった光景を、戦後すぐに見て書かれた歌詞でした。

Aさん… そうだったんですか。もう一度美しい街としてよみがえってほしいという願いが込められた歌だったんですね。

Bさん… 一番・二番の歌詞では、子供たちが楽しく遊んでいる姿が思い浮かびますが、三番の歌詞は一転して寂しい感じがします。この歌が作られた時期から考えると、戦争で家族や家を失った人たちの姿を歌ったものでしょう。

Cさん… そうですね。この歌はそういうふうな解釈できますね。ただ、「わたし」がこの歌を歌った理由について考えてみると、それは「(a)」からであって、歌の背景とは関係ないのではないのでしょうか。

Dさん… 私は、関係ない、とまでは言い切れないように思います。それは、小説のタイトルが「風のリボン」であることから明らかです。「わたし」は無意識のうちに「(b)」から、この歌を歌ったのではないかと思っています。

① 小さくても力強い渦巻きのような生命力にあふれた子供たちによって喚起された、誰かと歌いながら道を歩く思い出が脳裏によぎった

② 歌うようにさえずる子供たちを見ていることで引き起こされた、他の人と歌うことの新鮮さ、楽しさについての思いがあった

③ 誰かと一緒に歌うことがなくなる大人のあじけなさを感じたときに、他の人に呼びかける歌詞が多いこの歌が、記憶の片隅から現れた

④ 好奇心を四方に散らかしながら歌うようにさえずる子供たちが生んだ渦巻きにより、歌ばかり歌っていた昔の自分の記憶がききまぜられた

⑤ 美しい景色と戦争の暗さが同居するこの歌に、何もかもがないまぜになった「歌」というものの本質を感じ取っていた

⑥ 戦争の惨禍から再び立ち上がろうとする思いが残るこの歌と、粘り強く人生を歩んでいる七夕家さんの人生を重ね合わせて見ていた

問7 傍線部オ「まったく食欲の旺盛なやつらである」とあるが、このように言う「わたし」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選びなさい。解答番号は ㉗。

① 人生に残された時間がそれほど長くはないであろう自分と、これから何十年も生きていくであろう子供たちとを比べて、うらやましさを覚え感傷的になっている。

② 成長期にある子供たちに食事を食べさせることを優先したものの、子供たちから発散されている生命力が自分からは失われていることに気づかれ、たじろいでいる。

③ 子供たちの食事に對する純粋な欲求に圧倒されつつも、残されている人生の期間を自分と比べ、将来のある者を優先する大人としての在り方に充足感を覚えている。

④ 食事への高い意欲を見せる子供たちに接し、童心を失っていない自らの自分が、未来の時間が少ない大人としてのふるまいしかできないことを、不思議に思っている。

⑤ 食費という大人の事情にはまったく頓着せず、すべてのエネルギーを食べることに向けている子供たちの成長を短い時間でも手助けできたことを嬉しく感じている。

問8 七夕家さん一家と会った「わたし」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選びなさい。解答番号は ㉘。

① 「わたし」は、七夕家さんが前向きな詩作についての合評会にはあまり気乗りしていなかったものの、小さい子供がいるせわしない日常を送りつつも詩作を続けている七夕家さんに対して、尊敬の念を抱くようになった。

② 「わたし」は、詩作のアドバイスを求める七夕家さんに抗えず会うことにしたものの、子供たちはどう思われるかが常に頭の隅を占めていたので、子供の一人から「うらやましい」という言葉をもらい、嬉しさに満たされた。

③ 「わたし」は、もともと子供に魅力を感じており、七夕家さんの娘たちに会うことを楽しみにしていたが、子供たちの行動力と純粋さを目の当たりにして、言葉を発することできないほど圧倒されるも、快い疲れを覚えた。

④ 「わたし」は、七夕家さんの粘り強く、また、個性的な面にひかれ、詩作の対象として強い興味を持っていたが、小動物のようになってくると表情が変わる子供たちに会い、そ

の対象を子供たちになしよと決意を固めた。

⑤「わたし」は、子供たちと時間を過ごすことで自らの子供時代を思い出したり、人生で残された時間について思いを馳せたりして、七夕家さん親子がつくっている世界を、触れることができないかけがえのないもののように感じた。

問9 本文の表現の特徴の説明として適当でないものを、次の①～⑥のうちから二つ選びなさい。解答番号は ㉔・㉕。

① 波線部 a の「雨上がりの光る露のような言葉」は、「二人の娘」を連れてくるという七夕家さんの言葉を聞いて、雨に洗われた庭先で美しい露をふと見つけたときのように、わくわくする「わたし」の期待の高まりを表した表現である。

② 波線部 b の「宝物のような、子供たちの秘密」は、誰しもが子供のころに心の中に持っていたはずの目の前の世界に対する好奇心や楽しみや愛着を、子供たち自身が無意識のうちにいつくしみながら育っていることを表した表現である。

③ 波線部 c の「詩を書くという悪癖」は、七夕家さんに加え、「わたし」自身もしている詩作について、あえて逆説的に表現することにより、本文中ではあまり表に出していない「わたし」の詩作に懸ける熱い思いを垣間見ることができ表現である。

④ 波線部 d の「まるで人買いの女のように」は、七夕家さんの子供たちが放っている命の輝きにすっかり魅了されながら子供たちを見守っている「わたし」の様子を、商品の品定めをする「人買い」という表現でユーモラスに表している。

⑤ 波線部 e の「昆虫が触角を触れ合おうように」は、本当は詩の合評会よりも子供たちと触れ合っていたい「わたし」と、時は向いていないとはつまり引導を渡してほしい七夕家さんとの、うまくかみ合わない気持ちを表した表現である。

⑥ 波線部 f の「この世に浮んでいるしゃぼんだまのよう」は、七夕家さんと二人の娘に会った日のことをなつかしく思い出しながらも、独特の空気を漂わせた出来事であり、遠く甘やかな記憶として眺めていることを印象的な表現で表している。

解答編

英語

I 解答

- 1—④ 2—① 3—② 4—③ 5—② 6—②
7—② 8—③ 9—④ 10—②

解説

1. her の後ろにあるので名詞が適切。kindness 「親切さ」

2. 文の後半が「映画の残りは明日見よう」という意味なので、それまでずっと見ていたことがわかる。be getting tired 「疲れてきた」

3. so は目的の意味を表す接続詞なので、文の後半は「猫が外に出ないように」という意味になる。前半は「ドアを閉めなさい」という命令文にするのが適切である。

4. what to do 「何をすべきか」とすれば、「携帯をなくしたときに」という後半と合致する。

5. have A + 過去分詞「A を～してもらう」とすれば、「仕事の面接の前に髪を切ってもらった」という文脈に合う。

6. even though 「～にもかかわらず」という接続詞を入れれば、「その夜は寒かったにもかかわらず、彼らは外で座っていることに決めた」という文意が成立する。

7. but 以下の文が過去形で then 「そのとき」とあることから、前半は現在形ではないことがわかる。過去完了進行形の②が適切。「公園に行く」とずっと思っていたが、そのとき雨が降り出した」

8. 付加疑問文を作る。もとの文を否定文にしたときに使われる助動詞を使うので、この場合は want が一般動詞の現在形であるため、don't を使うことになる。

9. be allowed to do 「～することを許される」という意味になるので、不定詞の選択肢を選ぶ。

10. just in case 「～の場合に備えて」という慣用的な接続詞句。「道が混んでいる場合に備えて早く出なくてはいけない」という意味になる。